

芭蕉の風雅觀

能勢朝次

一四八

一四八

一、緒言

芭蕉の風雅觀を見る場合に於て、二個の大きい觀察點のある事を感じる。一は彼芭蕉が風雅といふことに對して、如何なる態度を持つてこれに臨んだかといふ點であり、第二には、其の風雅といふものゝ内容は如何なるものであるかといふ點である。而して此の内容如何の問題が、それに對する態度をも決定させるものであつて、芭蕉の如く風雅の爲に一生を捧げつくして精進し努力した人にまつては、風雅そのものゝ内容なり性質は、よほぎ深い意義を有するものでなければならぬと思はれる。内容が空漠として居り又貧弱なものであるならば、それに對して眞劍なる態度には出で得ないからである。

事實上から見れば芭蕉は俳諧のために全生涯をさへ、けて努力して居る。然らば芭蕉の俳諧といふものは如

何なるものであるか、それは單に藝術的作品であるか、或は藝術的作品を生み出す心境をいふのか、或はそれ以上の深く大なる意義を有するものであるのか、これ等が先づ問題として我々の心の上つて來る。それと同時に芭蕉がこの俳諧風雅に對して、如何なる態度でこれに向つてゐたかといふ事も考へ得られると思ふ。

芭蕉の風雅觀が其の圓熟の境地に入り、彼の全人格を動かす統一的原理にまで發展したのは、私の推測では、元祿以後(彼の四十五歳以後)であると思はれる。

即ち彼の風雅觀をうかゞふべき文献の多くは皆元祿以後のものであつて、其れ以前には或る一局面の思想や俳諧の詩趣をのべたものがあるに過ぎぬ。元祿元年の「笈小文」の卷頭の辭、同三年の「幻住庵記」、同四年の曲水に與へて風雅の三等を論じた書簡、同五年の「柗去辯」、同六年の「柴門辭」及び「送許六文」等は、何れも彼の圓熟せる風雅觀をうかゞふに足るものであ

尙此他に年代不明を稱せらるゝものに、惟然に與へて風雅を論じた「逍遙遊」、加賀の北枝にあたへて火事見舞をのべた書簡がある。これ等も考證すれば元祿年間のものであつて、共に風雅觀を探るべき好資料である。

上述の如く芭蕉の風雅觀が明かに現はれてゐる文獻は殆ど元祿時代のものであるが、其の根柢なるものは、遠く延寶天和貞享の頃から漸次に吸收され消化されつゝあつたもので、其の主要なる素因として普通にあけらるゝものは、貞門や談林風を通じてあらはれて居る滑稽觀、老莊の思想、漢詩文の影響、禪の影響、西行の影響等である。これ等は全體「冬の目」以前、即ち芭蕉が蕉風を建設する時代よりも以前に芭蕉に攝取せられたものである。しかしその時代には未だ渾然たる融合の域には達して居ないで、各々が彼の胸裡に雜然と雜居して居たに過ぎぬ。これが貞享元年の第一回の行脚を轉機として、蕉風藝術の中に消化せられたものである。此の間の消息は「虛栗」「野ざらし紀行」「冬の目」の三つを相對照して熟讀する時、自ら明かに觀取されると思ふ。この貞享元年の旅行は、芭蕉の生涯に於ける劃紀的の轉回をもたらしてゐる點から見ても、實に重大視すべきものであると信じてゐる。かく

て蕉風の併風成つて以來四五年を経て元祿に到り、そこで風雅觀として現はれたものであると思ふ。

以下先づ元祿時代に現はれたる文獻を通して彼の風雅觀を検し、次に其の素因として普通にあけられてゐる先人の影響をさぐつて、それが如何なる點に影響をあたへてゐるか、換言すればそれ等の素因を芭蕉が如何に消化吸收してゐるかを調査し、最後に風雅そのもの、本質に就て論じて見よう。

二、文獻による檢索

此の節に於ては、先づ芭蕉の風雅觀をうかゞふべき文獻を拾ひ出して、其の意味する所を一々に檢して行き、最後にこれを一の系統に要約して見ようと思ふ。

貞享四年から元祿元年にかけて、芭蕉は吉野行脚を試してゐる。其の紀行文の「笈小文」の卷頭に於て、彼は彼の自己批評風雅といふことに關して次の如く述べてゐる。

「百骸九竅の中に物あり。かりに名づけて風羅坊といふ。誠にうすものゝ風に破れやすからんことをいふにやあらん、彼れ狂句を好むこと久し。遂に生涯のはかりごととなす。或時は倦で放擲せんことを思ひ、或時はすゝんで人に勝たんことをほこり、

是非胸中に戰うて是が爲に身安からず。しばらく身を立てんことを願へども、これが爲にさへられ、しばらく學んで愚を曉らんことを思へども是がために破られ、終に無藝無能にして只此一筋につながらる。

以上の部は彼が自らを批評した言葉である。風羅坊は彼の俳號の一であるが、その語を用ひて自らを「羅の風に破れ易からんを言ふにやあらん」を述べたのである。此の文の中で著しく強調されてゐるのは、彼の狂句(俳諧)に對する異常なる執着さである。その強い執着は彼をして萬事を放擲せしめ犠牲にせしめてゐる。即ち俳諧が、内面的必然の勢で彼を驅つてゐることを見る。これはやがて彼が俳諧なるものに重大なる價値を置き、その價値のためには、すべてを犠牲にしても悔ゆる所なき心情を示したものと見得ると思ふ。「無藝無能にして此一筋につながる」を言つてはゐるが、それは一の謙遜の辭であり、實社會に役立ち貢獻する所のないことを遠慮した言ひ方であつて、彼の内心には、確に文藝家たる點に安んじ、そこに彼の使命を生命を發見してゐるものと見るが至當であらう。尙此れに類似した思想は、元祿三年の「幻住庵記」の末段にも見えてゐる。

「つら／＼年月のうつりこし、つたなき身の科を思ふに、或時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛龕祖室の扉に入らんさせしも、たよりのなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯のはかりごまなれば、遂に無能無才にして、此一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり老杜は瘦せたり。賢愚文質のひこしからざるも、いづれか幻のすみかならずやこ、思ひすて、臥しぬ。」

芭蕉も一時は仕官に志した事もあり、又禪に參じて其の悟を得んと志した事もあつたのである。しかし彼は俳諧に對しての執着を絶ち得ず、花鳥に情をいため風雲に身をせめざるを得なかつたのである。俳諧の創作を行脚、それは彼の終身の目的となつてゐる。又彼は

「風雅もよしやこれまでにして、口をこぢむすれば、風情胸中を誘ひて物のちらめくや、風雅の魔神なるべし。家を放下して、栖を去り、腰にたゞ百錢をたくはえて、杖杖一鉢に命をむすぶ。なし得たり風情、遂に菰をかぶらむは」(元祿五年、栖去辯)

ものべてゐる。此處に於ては、風雅といふことが、内面的必然の強さを以て、深い根柢から芭蕉の全人格

を動かして居るのを見る。「風情胸中を誘ひて物のちらめくや風雅の魔神なるべし」こいふ語は、彼が一時も俳諧を去るこゝあはざる執着さを、極めて力強く言ひ放つたものである。これは歌人西行が、萬の執着を脱し得ても、なほ花鳥風月に對する愛着を脱し得なかつたのこゝ酷似してゐる。しかも此處が藝術家の藝術家たる所であらう。これに關して注意すべきは、彼の壯年の頃の思想との比較である。彼が深川在庵の昔、佛頂禪師との茶話であるこゝ傳へられてゐるものに

「是非に交りながら是非につかはれず、自在に道を得んこゝは、俳諧に遊びて名利をいこはんには若かじ」

こいふ語がある。これに依れば、彼芭蕉も、初期に於ては「是非に居しつゝ是非につかはれず、自在に道を得ん」ための手段として、俳諧をながめたものゝ如くである。目的は従つて功利的人生の解脱にあつたらしく見える。勿論、これは話相手が禪師であつたこゝいふこゝにも依らうが、然るに晩年の彼は、たゞ俳諧に對する愛着のみが、其の心の全部を占めてゐるのである。名利に狂奔する人生からの束縛を脱するこゝいふこゝは、彼には殆ど問題となつては居ない。むしろ「なし得たり風情、遂に菰をかぶらんこゝは」こゝ、俳諧風雅

への憧憬のあまりに強いのを、我ながらいぶかり眺めつゝ、しかも其處に眞の安心立命の境地を發見してゐるこゝを、我々は見得るのである。

次に「笈小文」巻頭の後半に彼は風雅こいふこゝに就て次の如く述べてゐる。

「西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の畫に於ける、利久が茶に於ける、其の貫通するものは一なり。しかも風雅に於けるもの、造化に従ひて四時を友とす。見る所花にあらずこいふこゝこゝなし。思ふ所月にあらずこいふこゝこゝなし。像花かたちにあらざる時は夷狄に等し。心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で鳥獸をはなれて、造化にしたがひ造化にかへれこゝこゝなり。」

こゝに於て、芭蕉は西行、宗祇、雪舟、利久、の内面を貫通するものが一であるこゝのべてゐる。即ち和歌も連歌も畫も茶も、其の對するものは異なるが、何れかに於て名人の域に達したのものには、相貫きあふ所の或者があるこいふ。其の共通の或者こゝは即ち風雅である。即ち藝術の究極地に參する者のみに許さるゝ所の風雅の法悦である。更に言葉をかへて言へば、この風雅こゝはは藝術の眞諦こゝでもいふべきものである。芭蕉は此處に於て、各種の藝の内奥を貫くものが一であるこ

を断言してゐる。

此の藝術の内奥を貫くものが一であるといふことに連關して見るべきものと思はるゝは、柴門辭（元祿六年）の中の次の一節である。

「其の器（許六の器量をさす）繪を好み風雅を愛す。予試みに問ふことあり。繪は何のために好むや、風雅のために好むといへり。風雅は何のために愛すや。繪のために愛すといへり。其の學ぶ事二にして、用をなすこと一なり。まことや君子は多能を恥づといへれば、品二にして用一なること感ずべきにや。」

右の文に於て風雅を稱して居るのは、狹義の使用であり單に俳諧を意味するものである。芭蕉は許六が俳諧を繪をよくするを見て、其の何のためにこれを學ぶかをたづねたのである。許六の答辯は繪畫を俳諧とは、互に相依り相助けるものであることを意味した。即ち相互が密接なる相關的關係に立つものであつて、一方の修業が直に他の藝術に大なる貢獻をなすものであることを以て答へたのである。此の答は深く芭蕉を喜ばしめたに相違ない。「笈小文」に於ける「其の貫通するものは一なり」この芭蕉の論を、一事例により、自己の體験を以て答へたのである。即ち俳諧、繪畫の

兩者を統一するものは藝術の眞諦である。換言すれば芭蕉の所謂風雅である。

次に「しかも風雅に於けるもの、造化に従ひて四時を友とす」の意義如何の問題である。これは前述の西行以下の四人のたづさはる所のものは風雅であつて、且つ何れも造化に従ひ花月を友とする者であることを述べたものである。換言すれば、何れも藝術の天地に己の使命を發見し、皆等しく自然の生成流轉する生命に融合し、それを唯一の伴侶とするもので、此等の人々の所思所見は悉く花月であり滿腔風雅の心のみち／＼してゐる、且つ何れも功利的實利の世界からは、完全に超脱してゐることを述べたものであると見るべきである。

以上の心持から推す時に、風雅の精神なきものは夷狄禽獸に等しこの論は直に首肯し得られる。即ち芭蕉自らが風雅そのものに止み難い愛着を持つてゐる點、及彼の尊敬する先人が何れも風雅の世界に終始したことを認めた點よりして、芭蕉の心中には、風雅そのものが人生に於て無上の價值を有するものであるこの確信がある。従つて此の尊ぶべき心の糧を所有せざる者は、夷狄と見、禽獸と見ざるを得ないであらう。私は茲に風雅に關して芭蕉の下した價值觀の力強い一面を

見得ると思ふ。

次に「造化に従ひ造化にかへれ」の語意であるが、大體に於て造化とは自然といふほどの意で見られる。しかしこの「自然」といふ語も、芭蕉の語としては、老莊思想的な色調を帯びた一面のあることを見逃してはならぬ。即ち一面に於て美しい花月の天地を指し、他の一面に於ては、人爲的作爲的な實利の世界をはなれた無爲自然の道をさして居るのである。風雅の天地は此の兩面を有する。この天地へ歸れとは實利的社會より超脱せよとの語を其の内面に持つものご解すべきであらう。

老莊の思想に觸れた序に芭蕉が惟然に與へたご云はれてゐる「逍遙遊」を、瞥して見よう。

「道に逍遙の二字あるごは、心に天遊有て世をおもしろがらんごいふ事なり。天はこれを得て月清く、地は是を得て花咲けり。鶯ご魚ごはひらめきて遊ぶものなり。野馬は風にうかれて遊ぶものを、草食ふ牛の飽てしつかなる、蛇は其の尾に遊ぶんごすれば、牛の主はさまらせて打たん事を思ふ。はたご打たれて悲しからんは、遊ぶ時の心にかへよ。其の主の牛にはちかれて二なき鼻の缺けたる例も有らんに、すべて遊ぶごは先にして苦

しぶ事は後なり。誰か遊んで苦まざらん。苦まずして遊ぶ人は世にありて何人ぞや。世に實あり虚あり。實に遊ぶ人は虚に苦む。誰か實なくして虚にす、む人はある時のあるにぞいご、苦しむべき。虚に實あり、實に虚あらば、虚實は虚にして自在なるべし。

〔備考、此は書簡に添へて惟然へつかはしたものである。惟然が芭蕉に入門したのは年月未詳であるが、芭蕉ご惟然が同座で連句を作つて居るのは、元祿元年六月十九日の「蓮池の中に漢の花まじりけり」の歌仙が最初であるから、この書も其れ以後ご見做すべきだご思ふ〕

逍遙遊ごは勿論莊子の思想から來たものである。元祿以後に於ても、芭蕉の思想には、尙老莊の思想が其の一要素を成して居るごを知るべき文献である。惟然への示しの要點は虚實の論である。(虚實ごいふ思想は各務支考の俳諧十論の中にも論ぜられてゐるから、蕉門の風雅觀の一の特色を成して居るものご見て差支ないご思はれる。)

虚ご實ごは如何なる内容を持つて居るか。これは輕々に推斷するを許されぬ問題であらうが、老莊の思想

ミ、孔子を中心とする儒敎の思想ミにあてはめて考へるこゝも可能であると思ふ。實ミは功利的實世間ミ、その規範ミして存する道德の世界を指して居るものミ見て、大なる誤は有るまい。虚ミは普通には無爲の世界の意に用ひられる。しかし、芭蕉の言つた虚ミは純粹に老子の思想であるミは言ひ得ない。支考の十論なぞで論じて居る所から溯つて芭蕉の意を推測するミ、心に天遊ありて「ミいふ冒頭の言句の意が多量に含まれてゐるこゝを見る。即ち實利功利の世界や道德の世界から、一步超越して、それに煩はされる事なき、心に天遊ある世界である。私はこれを以て、芭蕉が「風雅の世界」を指して居るものミ斷定したい。惟然に教示した芭蕉の心持は大體次の如くに言ひ得る。即ち此の世界には風雅の世界ミ實利道德の世界の二つの世界がある。其の中風雅の世界のあるこゝは、人間の心に天遊があつて、世の中を趣味深く渡り行くためである。しかし風雅の世界ミ功利道德の世界は要するに、主觀の立脚地が異なるものであつて、實利道德の世界の中にも、眺め方によつては充分に風雅の天地自由の天地があり得る。従つて此處に我々の自在への解脱の途があるわけである。又同時に風雅の世界さいへぎも、實（誠、道德）の一面を備ふべきものであり、單なる放逸の世界

ではない。これを缺く時は又眞の風雅の世界を作り得るこゝは出来ぬものであるこの意を暗示したものと見得る。

次の芭蕉が彼の風雅の價値を論じたものミして「笈小文」ミ對照して見るべき「柴門辭」の一節を見よう。

「予が風雅は夏爐冬扇の如し。衆にさかひて用ふる所なし。たゞ釋阿、西行のこゝばのみ、かりそめに言ひちらされしあだなるたはぶれごこも、あはれなる所多し。後鳥羽上皇の書かせ給ひしものにも、これ等は歌に誠ありて、しかもかなしびをそふるものたまひ侍りしみや。さればこの御言葉を力ミし其の細き一筋をたぎり失ふこゝなかれ」

此に於て、芭蕉は彼の風雅（俳諧）が、功利的實生活に對して、無價値であるこゝを斷言して居る。物質的利益にも、又儒敎道德の如き實踐倫理にも、何等の寄與をも爲すこゝのない俳諧は、一般人の見地から見れば、夏爐冬扇に等しいと言はねばならぬ。從來の歌人や連歌師か、其のたづさはつてゐる藝術の尊嚴を維持しようとして、或は「歌道佛道一致説」や、「神佛の應驗冥護説」を持ち出して、何等かこれを實生活に利益あるもの、如く説いたのに比べて、芭蕉の見解は、たしかに一步をぬきんで、居るミ稱すべきである。却つ

て支考なきは、俳諧十論の中に、俳諧の徳なき、言つて仰々しい事をのべてゐるが、これは芭蕉の眞意は忘れたる妄言といふべきであつて、芭蕉は明かに、藝術の本質や使命を知つてゐたと思すべきである。

上述の如く芭蕉は風雅の價値を論じ去つて居るが、されば單に一面の觀察をのべたに過ぎぬ。それは釋阿西行の歌を論じた部分で明かに、かゝはれる。即ち此等の人々の歌を論じて、かりそめの戯言ではあるがあらはれる所多しと言つてゐる。「あはれ」は吾人の感情生活に對して深き價値あるの意である。「誠ありてかなしびをそふる」こいふ語は、其處に詠まれたる内容が人間の衷心よりあらはれた感情の聲であり、それは讀者の内心にひびいて強い感銘をあたへるものであることを言つたものである。芭蕉は此の一點を俳諧の上に於ても明確に保持すべきことをのべたのである。而して、芭蕉がこれを以て、風雅の本質を得たものとし、藝術上缺くべからざるものであると思へたらしいことは注目に價するところであると思ふ。「細き一筋」はこの點を指した語である。即功利的人生には價値なしに見られるであらうが、そこには吾人の内心に遁る一脈の情味があり、吾人の心の糧となるものゝあることを言つたものであると思はれる。

芭蕉の風雅觀

尙芭蕉は柴門辭の末段に次の如くのべてゐる。

「尙古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求めよ、南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も又これに同じきいひて灯をかゝけて柴門の外に送りて別るゝのみ」

こゝに於て見るべきは、「古人の跡を求めず、古人の求めたる所を求むる」こゝが、俳諧風雅に大切なることを言つた點である。「古人の跡」は如何かは、先づ起り來る疑問である。私はこれを、藝術家たりし古人の此の世に残した跡、換言すれば藝術的作品の見度い。西行、宗祇、雪舟の残した作品、利久が茶道に於て創始した茶道の法則の如きがこれに相當すると思はれる（勿論法則は藝術作品ではない。しかし古人の跡といふ時、利久の茶の湯の精神を傳へるために残した法則の如きは、茶道の精髓を具體化して表はしたものであるから、同列に論じても大差なしと思はれる）普通の藝術家に取つては、これ等は創作の規範であり手本であるわけであつて、専らこれに違はざらんじ遵守し則る所のものである。しかし芭蕉は、これを以て未だ至れりとはしなかつた。彼はこれを求めずして「古人の求めたる所」を求めよと教へてゐる。この言は大に味はふべき言であると思ふ。古人の求めたる所とは何で

あらうか。これには二つの方面があり得る。古の名人は、先づ傑出せる創作を作らんことを欲した、即ち歌、畫、等の眞の藝術的意義を體得して、眞に價値ある藝術的作品を創作することである。次には彼等の名人は單に創作するのみでなく、それより進んで、滿腔風雅の人となりん事を欲したことも明である。而してこの二者は相互に相依り相助けて、其の完成の道にすゝむものである。私は「古人の求めたる所」をいふをかく解するが妥當であると思ふ。かくして芭蕉の語を味はつて見るに、其の中に限りなき深き意味を見得る。即ち芭蕉は作品の背後にひそむ作者の心情のひゞきを聞き、その美しさを知り、自己を其の境地にまで向上せしめんことを教へたもので、單に先人の作を尊敬し模範とすることに過ぎ、まることを警めてゐるのである。誠に深く味はふべき語であると思ふ。

これと關聯して見るべきものに、元祿六年の「送許六辭」がある。曰く、

「古より風雅に情ある人々は、うしろに笈をかけ、草鞋に足を痛め、破れ等に霜露をいこひて、おのれが心をせめて、物のまことを知ることを喜べり云々」

此は 古の風雅に志ある人の求めたる一面をのべた

ものである。而して私が前に述べた、滿腔風雅の人となりんことを示したのである。芭蕉のこの語は、西行、宗祇の行脚生活に深い意義を發見した所から發した實感であると思はれる。しかも、彼の數回の行脚の賜たる深酷な彼の體驗によつて、彼は一層痛切にこれを感じたのである。身體を苦しめることは、心をして多感ならしめ敏感ならしめるに與つて力あるものであり、其の場合の見聞は、其の人の人生觀的な色彩を濃厚に帯びる。之は藝術の素材として甚だ貴重なるものであることは言を俟たぬ。「己が心をせめる」ことは、自分の心を最も純眞な謙虛な境地に持ち來たすことである。誇りかな概念を捨てることであり、虛なる心にまで下ることである。虛心は自然や人生の生命を、其の有りの儘の相に於て、豊かに享受する事が出来る。こゝに於て、「物のまことを知る」ことも可能になる。物のまことを知ることは、自己の心を自然や人生の生命に融合せしめることである。これは又やがて自己の生命を進展させる最良の策である。

元來行脚生活と東洋藝術との關係は、すこぶる注目し價するものである。宗教家の行脚は、それによつて執著を離脱する事を目的とする。執著とは小なる自我の束縛である。それを離れることは、小我を脱して大我

(佛)も一體の境地にまで進むことである。これを摸した藝術家の行脚は、又別種の寶を得たのである。西行の如きは、宗教的解脱を求めんとして行脚して、却つて藝術を得たこと稱すべき人である。芭蕉が行脚の度毎に其の詩境を著しく進めて居る點より見るも、彼が行脚生活の藝術的意義を如何に深く體驗してゐるか、うかゞはれる。東海道の一筋も知らぬ人、風雅におほつかなしと言つた彼の語は、單に行脚が見聞を廣め詩藝を肥やすことに大なる貢獻をすることのみを言つたこと解するのは淺薄であつて、彼の真意の半面だけを見たものといふべきである。風雅の心境を洗練し淨化し、深い人生自然に融合して、其の藝術を生む心を養ふことの必要を述べた一面を見のがしてはならぬ。

次に見るべきは、芭蕉が近江の曲水に與へて、風雅を論じた書簡である。これは元祿三、四年頃のものである。

「風雅の道筋、大方世上三等に相見え候。點取に晝夜をつくし勝負を争ひ、道を見ずして走り廻るものあり、彼等は風雅のうろたへ者に似候へども、點者の妻子をはごくみ、店主の腹をふくらし候へば僻事せんにはまさりたるべし。

又其の身富貴にして、目に立つ慰は世上を憚り、

芭蕉の風雅觀

人事言はんよりはこ、日夜に二卷三卷點取り、勝たる者も誇らず、負けたるものもしひて怒らず。いざ又一卷なきと取りかゝり、線香五分の間に工夫をめぐらし、終に即點なきと興することども、偏に少年のよみがらたに等し。されども料理をこゝのへ酒をあくまでにして、貧なる者を助け、點者を肥しむること、是又道の建立の一筋なるべきか。

又志をつこめ情を慰め、あながちに他の是非をこらす。これより誠の道にも入りぬべき器なりなきはるかに定家の骨をさぐり、西行のすぢをたゞり、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入るべき族、鄙鄙をかぞへて十の指をふさず。君もこの十の指たるべし。よく御慎み、御修業專一に存じ候。芭蕉の試みた三等の類別に於て、其の三者に共通な點は、俳諧を好み愛することである。しかし、其の動機や原因に到つては三者各々異つてゐる。第一は點取の勝負を目的とし、第二は娛樂を以て目的とし、第三は風雅の大道(誠の道)に入ることを以て目的としてゐる。點取といふ事は、談林時代に最も流行したもので、芭蕉の晩年の頃でも、凡俗な輩の俳諧は皆これを目的としてゐたらしく思はれる。芭蕉が許六に送つた

書(元祿二年)にも「當方無恙、五句附點取に脾の臟を捫む體に候。この脾の臟もみ破りたらん後、はじめ俳諧はやり出申べく候」こいふがある。芭蕉は極力これを戒めて、「誰もすまじきものは點取なり」こ、弟子に戒告をあたへてゐる。これは點取に耽つて家業を怠る者のあるばかりでなく、かゝる流行は俳諧の眞の目的を没却するが故である。「道を見ずして走りまはる」こは、俳諧の正道を逸してゐるこを指摘した語である。第二に、俳諧を娛樂とする者は、點取に比して其の害毒させらるゝ點は遙に少い。従つて芭蕉は、世上の俳諧を弄ぶ者に對しては、「俳諧は老後の樂、閑時の慰」こ言つて、暇ある時に靜にこれをなすべきこをすゝめてゐる。これは一面實利的な方面に何等の益をもたらさぬこを説き、そのために家業を怠るこを戒めるこいふ彼の親切心より出でた語であるこ共に、他面、すべての俳人が、風雅の大道に入り得る器でないこを熟知してゐる點より出でた言葉であらう。即ち、風雅によつて自己の生命を伸展させ、藝術の三昧境に入るこしては、其の器が十分ではないが、俳諧に對する興味を執着心の強い者に對しての芭蕉の態度は「俳雅は老後の樂」こ言はざるを得なかつたのであらう彼の臨終に及んでの遺言には、

「風雪をはじめこして、門人方不殘御暇乞申候。俳諧は老後の樂」こ申す事、彌々御忘有間敷候云々」こすら言つてゐる。

第三の者、即ち誠の道に入らんこする者、これが芭蕉の眞に求めた所である。誠の道は風雅の大道をさして居る。芭蕉自らは此の究極地に向つて、まつしぐらに進んで行つた人であつて、從來の俳人が芭蕉に及ばないのも、たしかに此の點の覺悟を缺いて居たゝめであるこ思はれる。芭蕉は其の境地に進まんこしてゐる弟子を稱して、曲水を激勵したのであつて、前の二つの類別は、これを言はんがための附加論である。而して其の要件として、「志を勉め情をなくさめ」こいふ。精進努力及び感情をなだらかならしむるこ、「他の是非をこらず」こいふ、自己の爲につくし、自己の修養をはかる點、第三には、其の修養として、古代の有名な詩人の藝術を充分に熟讀玩味して、其等詩人の胸中に融合同化し、それによつて深い藝術的情操を養ふべきここの三點を教示して居る。

芭蕉が見て以て俳諧風雅の大道に入るべしこ認めた弟子に對しては、芭蕉は常に風雅の道にすゝむべきこを激勵してゐる。この點より見て、彼が加賀の北枝に與へて、火災にあうた事をなくさめた書簡も注目す

べきである。

「池魚の災承り候。我も甲斐の山里に引移りさま
く、苦勞致し候へば、御難義のほご察し申し候。
されど燒にけりの御秀作（注曰、燒けにけりされ
ごも花は散りまさり）斯る時にのぞみ、大丈夫感
心、去來文章も御作おごろき申ばかりに候。名歌
を命にかへたる古人も候へば、かゝる名句に御替
被成候へば、さのみ惜しかるまじくご存じ候。

〔備考、此の手紙も年月未詳とされてゐるも
のである。しかし去來文章ご名を連ねた所か
ら見て推測するに、猿蓑の時代に上方に逗留
中のごごかと思はれる。去來は貞享三年の頃
に既に入門してゐるが、文章の句が連句の中
に見えるのは、元祿三年の「やすく、ごいで
ゝいさよふ月の空」の連句がはじめてであるか
らである。

此れは北枝が自分の家が火災にかゝつてゐるのに、
自若として「燒けにけり云々」の句をよんだごいふ、
其の藝術家的な態度を稱讚したものである。俳諧の佳
品を得るごごに比しては、實物的物質的な財を失ふ位
のごごは、さして惜むべきでは無いごいふ芭蕉の語は、
彼が如何に俳諧を眺めてゐたかごいふごごを明かに物

語つてゐる。功利的世界の外に、風雅の天地を開いて、
其れに向つて猛進してゆく芭蕉には、名句を命に代へ
てもごいふ古人の心持が充分に體得せられて居るごご
を見るのである。身を以て藝術に殉じようごした芭蕉
は、北枝の内面に、風雅の大道に入るべき器を見て、
如何に頼もしく感じたであらう。ごごに於ては、俳諧
は老後の樂ごいふ境地を脱して居るごごを見る。

次に年代は未詳とされてゐるが、芭蕉の風雅觀を見
るべき文献を二三あけて見る。

うらやまし思ひ切る時猫の戀 越人

翁此の句を、伊賀より去來が方へ書贈て云、俗情
あるもの一たび口に出でずごいふごごなし。彼が
風雅、ごごに到つて本性をあらはせりごごなり。是
より先に、越人が名四方に高く、人のもてはやす
發句多し。然れごも突に到つて、初て其の本性を
あらはすごご宣ひける。（一葉集及去來抄）

芭蕉の語はやゝ、輕い滑稽につゝまされてゐるが、其の
奥には、彼の藝術觀の根柢をなしてゐるものゝあるご
ごを認められる。藝術は畢竟作者の人格内容の表現で
ある。しかも、これは無意識の中に現はれるもので、
隠さうごご努めても、いつしか自然にあらはれて來る。

芭蕉は此の境地を知つて居るが故にかく去來に書き贈つたものと見られる。故に芭蕉は又「心を正しくして俗を離るゝより外なし」をも言つて居る。藝術の作品をして、眞に價値あらしめるためには、其の根本的な修養をして、人格を向上せしめ俗をはなれることは一刻も忘つてはならぬ。従つて芭蕉は、此の點に於て完全でありさへすれば、もやは創作はせずとも藝術家であるを述べてゐる。

「俳諧あながちに口にばかり唱ふるものに非ず。

心よく道に達し、今日の人情に通達して、是非變化自在ならば、一句の作あらずとも、我高弟也」

(一葉集)

即ち等しく人格の向上といふも、芭蕉のそれは、道學的な臭味を全く帯びてゐないし、又宗教的な色彩もない。さこまでも藝術を本體としてゐるのである。「心よく道に達し、今日の人情に通達する」ことは、藝術家の人格を養ふ最も重要な要素であり、「是非變化自在」なることは、彼の唱ふる風雅の大道に入るものゝ、必ず備ふべき要件であるのである。此等の境地は、藝術家としての彼の理想であつて、行脚生活の高唱も、古詩古歌の涉獵も、老莊思想の稱揚も、こゝに至つて其のみに統合されるものである。故に彼は又、

「俳諧をきらひ俳諧をいやしむ人あり。一方あるものゝ上にも道を知らざるこゝ(者の誤か)には、かゝるあやまちもあるこゝなり。其の品何れにせよ、俳諧ならざるこゝ更になし。其人甚だ俳諧をもて事をさばき、事をたのしむ」(一葉集)

と言つて居る。「俳諧をきらひ俳諧をいやしむ」こゝは、俳諧を創作することや、俳諧の作品を嫌ひいやしむことである。「俳諧をもて事をさばき事を樂む」といふ時、其の俳諧とは、芭蕉の俳諧觀の究極地、即ち風雅の大道を言つたものである。「一方ある上にも道を知らざる云々」は、たゞ作品や創作することのみを以て俳諧の全部と心得、其の根柢たる風雅の大道を忘れたる論の誤を指摘したものであらう。芭蕉が「無藝無能にして此の一筋につながる」と言つてゐるのは、彼が此の俳諧の窺極地に、彼の人生觀の理想を認め、其處に安住し得た故であると言ひ得る。

次に一葉集の中に次の如き芭蕉の語をあけてゐる。

「多年俳諧好みたる人よりは、外の藝に達したる人、早く俳諧に入るを申されたり」

此は風雅の道に入る道程を述べたものとして、見るべき價値があると思ふ。即ち芭蕉は、すべての藝術や藝能の窮極地に於ては、相通する所あるを知つたのであ

る。西行、宗祇、雪舟などの藝術をあけて、「其の貫通するものは一なり」と斷定したのを見ても明である。

この語は、或る一藝の蘊奥をきはめることによつて得たる心境や精神のはたらきは、他の藝によつて得たる所のそれと、甚だ微妙なる一致をなしてゐるものである。このことを言つたので、佛者の所謂拈華の一擲によつて相通する境地をさしてゐる。一度此の境地に入つたものは、早く俳諧の本質を悟得することはいふので、

「俳諧は教へてならざる所あり。よく通るにあり。或人の俳諧は曾て通ぜず。只物を數へて覺るやうにして、通るものにあらず。(一葉集)

と言ひ、又「冷暖自知」の時でなければ明らめ難しなご、言つて居るのを見ても、悟入にあることは明瞭である。悟入とは生命の飛躍である。生命の飛躍は、他に於て一度これを體驗した者には、直にこの境地に到り得るもので、偉大なる藝術家に、しばしば見る所である。

以上で芭蕉の風雅觀をうかゞふべき主要な文獻と、要旨をあげ得たと思ふ。勿論同じやうな事項を語をかへてのべて居るものは數多あるが、大體は右に述べた所です足りると思ふから、以下これを要約して見よう。

第一、芭蕉が「風雅」と唱へてゐる語の内容に二種

の區別がある。

(一) 俳諧そのものを指して言ふ場合。

(二) 風雅の大道を指していふ場合。

第二、等しく風雅といふも、他人に對して求める風雅と芭蕉自身が自己に向つて要求する風雅とに於て、程度、種類の差異のあることを見る。

(一) 一般の人々に對しては、風雅とは俳諧そのものを指して居る。そして其の中に於て、

(イ) 點取の俳諧を排斥する。これは俳諧そのもの意義を没却するが故である。

(ロ) 俳諧は老後の樂、閑時の慰なりとしてゐる。これは何人にも、風雅の大道に參ずることとは望み得ないことであり、又俳諧は自己の生業を捨て、まで熱中すべき性質のものでないからである。

(二) 彼の高弟に對しては、風雅といふ語は、單に俳諧に遊ぶことのみではなく、所謂風雅の大道に參すべきを訓してゐる。これは高弟ともいはれる人々は、充分に風雅の大道に參すべきだけの器量を備へて居り、且つ俳諧に強い愛着を持つて居るからである。而して芭蕉は一面にはこれ等の人々に自己の伴侶を求め

たのである。

(三)芭蕉自身に取つては、俳諧の創造鑑賞を通して、風雅の大道に入ることは、彼の理想であり、生涯の精進向上の一路である。そして此のことは、意志的な努力を要せずして、内面的必然の強さを以て彼を押し動かしてゐるのを知るべきである。

第三「風雅の大道」に就て。この中には三個の問題を含んでゐる。一は其の意義に關するもの、二は其の價値に關するもの。三は其の道に入るべき手段要件に關するものである。

(一)風雅の大道の意義に關して、

(イ)風雅の大道といふのは、各々の藝術の根柢を貫通する一なるものであり、各々藝術は其の窮極地に於て何れもこの一なる世界に連る所のものである。いはゞ藝術の絶對境、或は藝術のアブリオリによつて統一せられたる世界さといふ得べきものである。

(ロ)俳諧を創作することは、此の大道に參ずるためには缺くべからざる要件ではあるが、創作即風雅の大道とは言はれない。眞に創作するとの根柢となり基礎となる所のものである。

(ハ)風雅の大道に入ることは、實利や功利の世界とは交渉である。即ちこれ等の世界を超越してはじめて到達せらるゝ世界である。

(三)風雅の大道の價値に關して、

(イ)風雅の大道に入るこいふことは實利的功利的人生に對して無價値である。夏爐冬扇であり非生産的なものである。

(ロ)風雅の大道に關與するこ否きは、人々禽獸を分つ所以である。即ち眞の人たらんことを欲せば當然に風雅を心得べきである。こゝに風雅の偉大なる價値がある。

(ハ)風雅は吾人の内面的生活、情意生活に對して、無限の價値を持つものである。芭蕉をして内面的必然の強さを以て風雅に向はしめたのは、此の價値の有する魅であつた。

(ニ)功利的な人生に伍するも、此の風雅の世界に目ざめた者には、其の浮世の煩累を轉じて、無限に自由なる天地となすこが出来る(逍遙遊)

(三)風雅の大道に參すべき要件、

(イ)造化に従ひ造化にかへれ。即ち先づ天地自然に親炙して其の生命を感得し、それに融合

同化せよ。

(ロ) 行脚により身を苦しみ心をせめて、物のまごころを感じせよ。

(ハ) 古典に通じ古藝術の粹を味はひ、藝術の本質を知るに共に藝術的情操を養へ。

(ニ) 古人の跡を求めずして、古人の求めたる所(藝術の極地に参じて傑作を得んごしたる點)を求めよ。

(ホ) 藝術の根柢たる人格の修養をはかれ。心を正しくして俗を離れよ。

(ヘ) 精進努力して、あくまで風雅の本體に肉迫し、生命の飛躍によつて其の中に悟入せよ。

以上で文献にあらはれたる所を綜合して彼の風雅觀の主要を鳥瞰したので、次には彼に影響を及ぼした先人の影響を調べて見よう。(未完)